

青年期女子の性同一性の発達

—— 自尊感情、身体満足度との関連から ——

伊 藤 裕 子¹

本研究の目的は、第1に、青年期女子の性同一性を測定する尺度を開発してその発達過程を明らかにし、第2に、自尊感情および身体満足度と性同一性との関連を検討することにある。中1、中3、高2、大学に在籍する701名の女子青年に、性同一性、自尊感情、身体満足度を尋ねた。その結果、(1)女子青年の性同一性は、父への信頼、母への同一視、ステレオタイプな性役割への同調、性的成熟への戸惑い、性の非受容から構成される、(2)性同一性は中学1年から3年にかけて低下し、その後上昇するという発達の変化を示す、(3)身体満足度との関連から、青年前期には身体的側面において性同一性の危機が経験されている、(4)青年期における女子の自尊感情は、両親の良好な関係を認知し、その関係を生み出す源泉としての父親を頼りに思い尊敬できること、および自己の性を受容できることが関係していた。このことより、性同一性から摂食障害に至る過程において、母親の存在の背後にある父親の影響が小さくないことが示唆された。なお、性同一性尺度(GIIF)の信頼性、構成概念妥当性、および基準関連妥当性も併せて検証された。

キーワード：性同一性、女子青年、自尊感情、身体満足度、摂食障害

性同一性(gender identity)とは一般に、男性あるいは女性としての自己の在りように対する確信度を指すが、Money & Ehrhardt (1972)は、「一人の人間が男性、女性あるいは両性として持っている個性の統一性、一貫性、持続性」と定義した。Moneyは生物学的性sexと独立した心理・社会的性genderの存在を最初に指摘した人物で、ジェンダーを基盤とする性同一性を、性別認知を出発点とする包括的な概念として定義した。肉体的な性と心理・社会的な性の不一致については、近年、我が国でも精神医学領域で性同一性障害として取り上げられるようになり、そこでは性同一性を、①中核性同一性(core gender identity：男/女という自己認知、性自認)、②性役割(gender role)、③性的指向性(sexual orientation)の3側面から成るものとしている(小此木・及川, 1981)。

一方、Moneyによって提唱されたジェンダー概念はフェミニズムの中に急速に浸透し、1980年代以降、性差および性役割研究はジェンダー概念で包括されるようになった(伊藤, 2000a)。その結果、性同一性はステレオタイプな性役割行動の起源(Kohlberg, 1966)あるいはジェンダー・スキーマを獲得した結果(Bem, 1981)などとして幼児期の発達過程を説明するものから、性役割パーソナリティの測度とされる男性性・女性性を個人

の性同一性とする(石田, 1994 ほか)など、性同一性は従来の性役割研究の枠組みの中でも、さまざまなレベルで使用されているのが実情である。

他方、これらとは別の角度から性同一性を扱ったものにアイデンティティ研究の流れがある。Erikson (1959/1973)は、自我同一性の確立期における発達課題の1つとして性同一性の獲得をあげているが、実際、女子のアイデンティティを研究する上で性の領域は欠かせないものとされ、婚前交渉への態度(Marcia & Friedman, 1970)、性役割(Matteson, 1977)などが、価値観と並ぶ重要な領域として扱われてきた。そのなかでJosselson(1973)は、女子のアイデンティティ形成は男子とは異なった経路をたどり、他者との関係のなかで発達するという、その後の関係性の視点からのアイデンティティ研究に先鞭を付けた。

このように性同一性の研究には3つの大きな流れがあり、前二者はいわばジェンダーのアイデンティティを研究対象としているのに対して、後者はアイデンティティ(自我同一性)の中のジェンダーを扱ったものである。そこで本研究では、後者のアイデンティティ研究と混同を避ける意味で、旧来から用いられている性同一性という用語を使用し、かつ、第2の立場からアプローチを試みようとするものである。

性同一性の獲得は、古くはKohlberg(1966)の認知発達理論、近くはBem(1981)のジェンダー・スキーマ理

¹ 聖徳大学人文学部
〒271-8555 千葉県松戸市岩瀬550

論など、主として幼児期を中心に認知的側面から獲得過程が論じられてきた。確かに性の恒常性を獲得した児童期以降、性同一性は安定期に入るが、その後、ジェンダーにとって最も大きな転換期にあたる思春期に、性同一性がどのような危機を迎えるかは必ずしも十分に論じられてはいない。

伊藤 (1997; 2000b) は性同一性の発達過程を記述するなかで、青年期における性同一性の形成には2つの相があるという。第1は青年前期で、急激な身体発達と性的成熟を契機に自己像が不安定になり、性同一性の身体的側面における危機が訪れるという。それはこの時期、自己の性を受容する者が女子で急減することからもうかがえる (東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会, 1999)。第2の相は中・後期で、認識能力の高まりや社会経験の増大に伴って性役割の理解が進み、異性関係が生じてくると、性同一性の社会的側面 (性役割同一性) における危機が訪れる。それはこの時期に女子で性役割葛藤が急増することから推察される (伊藤・秋津, 1983)。しかし、第2の相についてはこれまでの性役割研究やアイデンティティ研究で知見が蓄積されているものの、性同一性を青年前期から後期まで1つの測度で発達の变化を記述した研究はみられず、ここに述べた発達過程も直接検証されたものではない。

そこで本研究では、青年期女子の性同一性の発達過程を明らかにすることを第1の目的とする。これまでも性同一性を研究主題として面接法を用い、女性性受容における葛藤内容と葛藤の背景を明らかにした研究はみられたが (青木, 1991; 松本・村上, 1985)、中学生 (青木) あるいは大学生 (松本ら) と対象年齢が限定され、その関心も臨床的視点に基づくものだった。

だが、それらの研究に共通するのは親との関係で、女性性受容群では、両親との肯定的関係および母親への同一視が、非受容群では否定的関係および非同一視が見出された。なかでも非受容群に特徴的なのが、両親を親としてだけでなく、父親を母親の夫として、母親をその夫に対する妻という側面から評価しており (青木, 1991)、この時期には女性としての母親の生き方が同一視の対象として大きな要素を占めるようになってくる。実際、性同一性障害170例 (性転換症) の23%が両親の離婚を経験しているという報告もあり (阿部, 1999)、家族内力動の不安定という問題だけでなく、性別モデルの問題がそこにはあるように思われる。いずれにしろ親との関係、両親の夫婦関係を通して、同性モデル、異性モデルとしての父母の存在が、娘の性同一性に大きく関係してくるものと思われる。

ところで先の伊藤 (1997; 2000b) によれば、性的・身体的成熟を迎えることにより、性同一性は中学の段階で身体的側面における危機を経験するというが、そのことは自尊感情とどのように関係してくるだろう。青年期になると全般に抑うつ傾向が強まり、自己評価が低下するといわれるが、女子にその傾向が著しく、青年期における女子の自己評価や自尊感情の低さが指摘されている (伊藤, 1988; 無藤, 2000)。実際、その発達過程をみると、小学校5・6年から中学2・3年にかけて女子の自尊感情は著しく低下し、高校段階までほぼそのまま、大学になると回復するというUないし逆J字型を示している (鈴木・伊藤, 2001)。

一方、近年増加傾向にある摂食障害に共通するのは、ボディー・イメージの歪みと自尊感情の低さである。思春期やセブ症ともいわれるように、思春期の女子に多発し、体重の増加や脂肪の沈着を嫌悪し、食事をコントロールすることによって“やせ”という美と達成感を同時に得ようとするものである (浅野, 1996)。思春期における女子の自尊感情の低下には、この摂食障害に通底する身体的外見に対する不満足があり、Harter (1998) によれば、女子は小学校高学年頃より年齢に伴って身体的外見に対する満足度が低下し、高校の最後には男子に比べて劇的に低くなるという。無藤 (2000) も、この時期は自己の身体の外見をめぐる、男子よりも女子が強い危機にあることを指摘する。

思春期にみられる急激な身体発達と性的成熟が、女子青年のなかでどのように受け止められ、自己に統合されるかは、まさしく性同一性の問題になってくる。しかし、摂食障害への有益な示唆を生むと思われる身体満足度や自尊感情と性同一性の関係は、これまで臨床分野では度々指摘されてきたが (向井, 1998 ほか)、ある段階を取り上げてその因果関係を明らかにするという研究はみられるものの (馬場・菅原, 2000)、同一測度によって青年前期から後期まで発達段階を追ってその関係を検討した研究はなく、これを明らかにするのが本研究の第2の目的である。

なお、本研究は冒頭に述べた第2の立場から性同一性を扱うものであり、その際、自己の性をどのようにとらえるかという認知的視点からアプローチする。すなわち、性同一性を、性役割同一性を含みながら、二次性徴による性的・身体的成熟を契機とした自己の性への覚知、そして混乱を経た再定義というプロセスを含めて構成しようとするものであり、性役割パーソナリティはここに含めない。

研究1 性同一性尺度の作成

目的

本研究の目的は、青年期女子の性同一性の構造を明らかにし、それを測定する尺度を作成することにある。

方法

(1) 項目の収集と選定 性同一性を構成する領域として、I「自己の性別に対する評価」、II「自己の身体およびその変化、女性の身体の受容」、III「性役割の受容」、IV「同性モデルとしての母親への評価」、副領域としてV「母親との関係における父」を設定し、これらの領域をカバーする項目を収集した。具体的には、青木(1991)が中学生を対象に面接法で設けた性同一性の領域(女性観、男性観、身体像、初潮体験、母親像、父親像、友人関係(同性・異性))と面接内容の評価分類の基準(肯定的、否定的、両価的)に基づき、また、大学生を対象にした土肥(1996)のジェンダー・アイデンティティ尺度で抽出された因子「性の受容」「ジェンダー・モデルとしての父母との同一化」「異性との親密性」に含まれる項目等を参照しながら、独自に113項目を収集した。次に、これらの項目を内容の重複、各領域の項目数のバランス等を考慮し、最終的に70項目を予備調査項目とした。

(2) 調査の実施 千葉県内の大学生女子100名を対象に、1998年9月、授業時に集団法で調査を実施した。評定は「全くそう思う」～「全くそう思わない」の5段階で、各々に5～1点が配されている。

結果

女子青年の性同一性の構造を明らかにするため、得られた100名の回答に基づき、相関行列を算出し、因子分析(主成分分解、バリマックス回転)を行った。当初、仮説的に設定した領域が4ないし5領域だったので、4因子および5因子での解釈を試みた。その結果、5因子構造が妥当と判断した(累積寄与率36.94%)。

第1因子は、父親は尊敬できる、頼りになる存在で、父と母は互いの生き方を尊重し、母親はそのような父と結婚して幸せであり、自分も父のような人と結婚したいという内容で、副領域V「母親との関係における父」に相当する。娘にとっては信頼感の源泉としての父といえ、「父への信頼」と命名した(寄与率10.49%)。第2因子は、女性観、男性観に関わる内容で、女性にとって大事なことは他人を思いやることであり、幸福な結婚は何事にも代えがたく、また、男性ではスポーツのできる、たくましい体つきを魅力とするようなステレオタイプな性役割を記述したもので、「ステレオタイプな性役割への同調」と命名した(7.95%)。これはIII

「性役割の受容」に相当する。第3因子は、母親は子どもを包み込むような存在で、何よりも第一に子どものことを考える、そんな母を思うと気持ちがなごみ、それゆえ、母のような生き方をしたい(逆転)というもので、IV「同性モデルとしての母親への評価」に相当し、「母性としての母への同一視」と命名した(6.41%)。第4因子は、胸が膨らみ、体毛が生えてくることが恥ずかしくて悩んだり、初潮を言い出せなかったりするような、成長過程での性的・身体的成熟にまつわる戸惑いを表したもので、「性的成熟への戸惑い」と命名した(6.14%)。これはII「自己の身体およびその変化、女性の身体の受容」に相当する。第5因子は、女に生まれたことは損で、男に生まれた方が良かったと感じ、また、女性の生理や独特の丸みのある体が嫌で、他方、異性に対する不安を持つという内容で、女性性の拒否や異性への不安を表しており、「性の非受容」と命名した(5.95%)。これはI「自己の性別に対する評価」に相当する。結果として、当初設定した4領域と副領域1の合わせて5領域が、女子青年の性同一性を構成する次元として抽出された。

次に、利便性の高い測定尺度を作成するために項目を精選した。各因子において、.40以上(第4因子のみ.35以上)を基準に、因子負荷量が高く、かつ意味の重複が少ない項目を各因子から6項目選択し、計30項目で再度因子分析(主成分分解、バリマックス回転)を行った。その結果、因子の出現順位は多少入れ替わるが、2項目を除き、他の全ての項目が.40以上で当該因子に負荷していた(累積寄与率46.40%)。落ちた項目は「すぐ弱音を吐く男は頼りない」(旧第2因子)、「異性を好きになっても相手が何を考えているのかわからない」(旧第5因子)だった。

最後に、各下位尺度の信頼性を α 係数を算出して確認した。第1因子(6項目).85、第2因子(5項目).75、第3因子(6項目).83、第4因子(6項目).66、第5因子(5項目).72で、第4因子が若干落ちるが満足すべき値といえる。なお、TABLE 1に最終的に選定された28項目を示した。

研究2 性同一性尺度の検討

目的

研究2では、研究1で作成された性同一性尺度の信頼性、妥当性を検討することを目的とする。実際に尺度を適用する青年前期から後期までの女子青年を対象に、性同一性の因子構造を確認し、下位尺度間の関係も併せて検討する。

方法

(1) 調査内容 研究1で作成された性同一性尺度28項目(5段階評定)。他に妥当性検討のため、女性性の受容「女に生まれて良かった」(「非常によくあてはまる:7」～「全くあてはまらない:1」の7段階評定)と生まれ変わりの希望(男・女)を尋ねた。

(2) 調査の実施 調査は2回実施された。1回目は1998年10～11月に行われ、対象者は沖縄県内の公立中学1年67名、同3年69名、公立高校2年113名、計249名の女子である。2回目は1999年9～10月に実施され、対象者は千葉県内の公立中学1年107名、同3年87名、私立高校2年103名、私立女子大学2～4年155名、計452名の女子である。学年ごとにみると、対象者は中学1年174名、中学3年156名、高校2年216名、大学生155名、計701名であった。調査方法は、女子のみが対象者のため、公立中学・高校では調査用紙を生徒に渡し、後日回収する留置法をとり、私立高校・大学では授業時に実施する集団法によった。

結果と考察

1. 女子青年における性同一性の構造

先に作成された尺度は大学生を対象に検討されたも

のなので、実際に尺度を適用する青年前期から後期までの女子青年を対象に性同一性の因子構造を検討した。701名の回答を基に因子分析(主成分分解、バリマックス回転)を行い、第5因子まで求めた(累積寄与率47.07%)。結果はTABLE 1に示す通りである。

因子負荷量.40以上の項目を基に解釈したところ、第1因子「父への信頼」、第2因子「母性としての母への同一視」(旧第3因子)、第3因子「ステレオタイプな性役割への同調」(旧第2因子)までは項目の異同がみられなかった。しかし、第4因子「性的成熟への戸惑い」では、「男子と一緒にスポーツをしたとき、体力の差を感じて嫌である」が落ち、代わりに旧第5因子の「異性と交際することに心のどこかで不安がある」が入った。また、第5因子「性の非受容」では、「女性は生理があるから嫌である」「女性独特の丸みのある体が嫌である」の2項目が落ち、性別の評価に関わる2項目のみとなった。

このように青年前期・中期の対象者を加えることによって身体に関する項目に若干の移動がみられたが、むしろ全体としてはすっきりし、当初設定した性同一性を構成する領域がより明確な形で抽出され、研究1

TABLE 1 性同一性の因子分析結果と下位尺度の信頼性

項 目	Fac 1	Fac 2	Fac 3	Fac 4	Fac 5	h ²	r
父は尊敬できる人だ ($\alpha = .88$)	.86	-.06	-.03	.06	-.02	.75	.86
父は思いやりのある温かい存在だ	.80	-.12	-.10	.00	.04	.67	.81
いざというとき父は頼りになる存在だ	.80	-.12	-.12	.04	-.02	.68	.82
母は父と結婚して幸せだと思う	.78	-.15	-.05	-.04	.03	.63	.81
結婚するなら父のような人と結婚したい	.74	-.10	.14	.07	.03	.57	.75
父と母はお互いの生き方を尊重している	.68	-.26	-.05	-.03	-.08	.54	.73
母のように女ならではの人生の楽しみを見つけない ($\alpha = .75$)	.25	-.70	-.14	-.03	-.07	.58	.73
母は子どもに対して包み込むような存在である	.22	-.69	-.16	.08	.15	.59	.74
母のことを思うと気持ちがなごむ	.16	-.67	.02	.21	.11	.53	.68
母のような生き方を私はしたくない(逆転)	-.22	.60	-.11	.21	.03	.47	.60
母は何よりも子どものことを第一に考える	.14	-.59	-.16	.08	.19	.44	.66
母は子どもの教育・養育において 全ての責任を負っているのだから偉いと思う	.13	-.47	-.32	.12	.00	.36	.59
男性はスポーツの1つくらいはできて当然である ($\alpha = .66$)	.06	.02	-.71	.08	-.08	.52	.70
女性にとって大事なことは他人を思いやることである	.20	-.16	-.64	-.03	.12	.49	.62
女性にとって幸福な結婚は何事にもかえられない	.13	-.15	-.63	.10	.05	.48	.68
女性は愛きょうのある方がよい	.07	-.17	-.59	-.06	.07	.39	.56
たくましい精悍な体つきは男の魅力として重要である	-.00	-.15	-.49	.19	-.01	.30	.59
女性は体力や精神力の面で男性に劣る	-.01	.06	-.42	.09	-.37	.33	.52
成長段階で胸がふくらんできて悩んだことがある ($\alpha = .56$)	.04	-.08	-.00	.64	-.05	.42	.67
体毛が生えてきたことはすごく恥ずかしかった	.07	-.03	-.15	.64	.04	.44	.63
胸が大きくなって体育の授業がやりにくかった	.03	-.13	.03	.61	-.21	.43	.62
異性と交際することに心のどこかで不安がある	.13	.04	-.10	.47	-.10	.26	.52
初潮のとき恥ずかしくてなかなか言い出せなかった	-.08	-.08	-.05	.44	.01	.21	.58
私は女に生まれて損をした ($\alpha = .75$)	-.00	.07	.08	.04	-.83	.70	.90
男として生まれた方が幸せだった	.02	.04	-.01	.06	-.82	.68	.89
女性は生理があるから嫌である	-.12	.08	-.23	.11	-.35	.21	
男子と一緒にスポーツをしたとき体力の差を感じて嫌である	.03	.07	-.14	.39	-.34	.29	
女性独特の丸みのあるからだ嫌である	-.03	.02	-.12	.37	-.29	.24	
2 乗 和	4.00	2.63	2.42	2.12	2.01		
寄 与 率 (%)	14.29	9.40	8.65	7.57	7.16	47.07	

で明らかにされた因子構造は基本的に確認された。そこでこれを性同一性尺度(女性版)(Gender Identity Inventory for Females: GIIF)とした。

2. 下位尺度間の関係

性同一性を構成する各領域が相互にどのような関係にあるかを検討した。まず、各下位尺度に含まれる項目の単純加算値を算出して尺度得点とし、下位尺度間の相関を求めた。結果は、TABLE 2 に示す通りである。

TABLE 2 性同一性下位尺度間の相関 (N=701)

	父への信頼	母への同一視	性役割への同調	戸惑い	性の非受容
父への信頼	—	.45***	.20***	.10**	-.01
母への同一視		—	.30***	.15***	-.15***
性役割への同調			—	.23***	.03
戸惑い				—	.17***
性の非受容					—

*** $p < .001$, ** $p < .01$

これをみると、父親に対する評価と母親に対する評価は密接に関連し、母親のような女性になりたいと思う背景に、娘からみて、母親が父親(夫)と信頼に満ちた幸せな結婚生活を営んでいるという認知があることを推測させる。また、そのような父母に対する肯定的な評価とステレオタイプな性役割観にも高い相関がみられ、母親と父親を同性モデル・異性モデルとして取り込むことができる者は、ステレオタイプな性役割を受容しているといえる。一方、性の非受容と母への同一視には負の相関がみられ、母親を同一視の対象とせず、否定的にみることが性の非受容と結びつく。しかし、父親をどうみるかはこれに関係しない。また、性の非受容は性的成熟への戸惑いと正の相関がみられ、思春期における性的成熟とそれに伴う身体的変化をうまく受け入れることができないと性の非受容に結びつきやすい。事実、中学1年における両者の相関は $r = .31$ ($N = 174$, $p < .001$)と高く、学年が進むにつれ両者の関連は弱くなるが(中3で $r = .18$, 高2で $r = .07$)、この時期に起こる身体的変化をどう受け止め、乗り越えるかが、性の受容と密接に関係するといえよう。しかし、成熟への戸惑いそれ自体は成長過程で誰しもが経験することであり、それが過度でない限り適応上の問題を示すものでないことは、ステレオタイプな性役割観や母親・父親への肯定的評価と正の相関をもつことからうかがえよう。

3. 尺度の信頼性・妥当性

信頼性は下位尺度の整合性について検討した。すでに研究1で検討がなされているが、尺度を適用する青年前期から後期までの対象者を用いて再度検討を行っ

た。その結果、TABLE 1 右欄に示されるように、尺度得点とその尺度に含まれる項目との相関は.52～.90と非常に高く、不適切な項目はみられなかった。しかし、 α 係数が第4因子で.56と低く、「性的成熟への戸惑い」は、対象者がどの発達段階にあるかによって受けとめ方が異なるため変動が大きく、結果として高い整合性が得られなかった。しかし、その他の尺度に関しては比較的満足できる値といえよう。

次に、妥当性について検討した。すでに研究1で明らかにされているように、本尺度では当初設定した性同一性を構成する領域が各因子として抽出されており、その点から構成概念妥当性(因子的妥当性)は保証されている。しかし、本尺度が性同一性の個人差を測定しているかについては不明である。基準関連妥当性(併存的妥当性)では、大学生を対象に作成された土肥(1996)の尺度があるが、性的成熟を迎える青年前期にも適用できる既存の性同一性尺度はない。そこで青木(1991)の構成概念に基づき、女性性受容群と非受容群で性同一性の各領域の回答内容が異なっていたことを論拠に、本研究では受容群と非受容群を外基準として、下位尺度に差がみられるかを検討した。青木では、「女に生まれて良かったと思う」(7段階評定)、「生まれ変わるとしたら男女どちらがよいか」の組み合わせにより、受容群(「非常によくあてはまる:6」・女)と非受容群(「全くあてはまらない:0」・男)の両極を抜き出し、面接している。そこで同様の方法で2群を抽出した。しかし、受容群(7・女)は117名となったが、非受容群(1・男)は同様の基準では十分な数に満たないため(1;28名)、基準を緩め(2;23名, 3;27名)78名とした。

下位尺度ごとに受容群と非受容群でt検定を行ったところ、「性的成熟への戸惑い」($t = 0.88$, $df = 193$ 以下略)を除く全ての尺度で有意な差がみられた(「父への信頼」 $t = 1.88$, $.10 < p < .05$, 「母性としての母への同一視」 $t = 4.09$, $p < .001$, 「ステレオタイプな性役割への同調」 $t = 2.99$, $p < .01$, 「性の非受容」 $t = 21.10$, $p < .001$)。すなわち、受容群は非受容群に比べ、父親・母親に対して肯定的で、母親を同一視の対象とし、伝統的な男性観・女性観をもち、自分が女性であることを肯定的に評価するといえ、これらの点で青木(1991)の面接結果と一致した。しかし、青木が指摘する非受容群における身体像に関する自己評価の低さや強い劣等感、本研究の「性的成熟への戸惑い」で両群の差としてみられず、性的成熟や身体像に関しては、激変の渦中にある青年前期と、ある程度客観視できる中期以降とを分けて考えた方がよいのかもしれない。いずれにせよ「性的成熟への戸惑い」は妥当性の点で

若干問題が残った。

研究3 性同一性の発達と自尊感情、身体満足度

目的

本研究の目的は、第1に、青年期における性同一性の発達の变化を明らかにすることである。第2は、性同一性が自尊感情および身体満足度とどのように関連するのか、また、その関連の仕方に年齢による違いがみられるかを明らかにすることである。

方法

(1) 調査内容 ①性同一性：研究1で作成された性同一性尺度28項目(5段階評定)。②自尊感情：RosenbergのSelf Esteem Scale10項目を、山本・松井・山成(1982)が邦訳したものを使用した。評定は「あてはまる」～「あてはまらない」の5段階である。③身体満足度：「あなたは女性としての今の身体が好きですか」²に対する回答で、評定は「とても好き」～「とても嫌い」の7段階である。

(2) 調査対象 対象者は研究2と同一で、中学1年生174名、中学3年生156名、高校2年生216名、大学生155名、計701名的女子である。調査は1998年10～11月、1999年9～10月に実施された。

結果と考察

1. 性同一性の発達

性同一性の発達の变化を明らかにするため、下位尺度ごとに学年を要因とする1要因の分散分析を行った。有意差のみられた要因の下位検定にはScheffeの方法を用いた。結果はTABLE 3に示す通りである。

これをみると発達の变化が大きくみられるのは父母像についてである。父親像、母親像とも中1から中3にかけて一度低下し、高2になると回復し、大学で評価はさらに肯定的になる。これに対してステレオタイプな性役割への同調が中3で強まり、周囲から期待される振る舞いに敏感になり、とらわれるようになる。一方、性的成熟への戸惑いが最も強いのは中1で、初潮を伴う身体的変化が大きいがゆえに変化への戸惑い

² 身体満足度を単項目で測定することについて、妥当性の点で問題があると思われる。しかし、鈴木・伊藤(2001)では、本項目と意味的に同一の「自分の身体が好き」を含む4項目で身体満足度を尺度構成しているが($\alpha=.77$)、他の3項目との相関は(N=164)「自分の身体に満足」.83、「自分の身体は異性からみて魅力的」.48、「自分の身体に強いコンプレックス」-.42で十分高い相関があり、この項目が他の3項目によって説明される割合(SMC)も.71と非常に高い。それゆえ間接的にはあるが、本項目が身体満足度の指標として代表性の高い項目であるといえよう。

TABLE 3 学年による性同一性の分散分析結果と平均値、SD

	中1	中3	高2	大学	F値	下位検定
父への信頼	19.22(5.20)	17.93(5.86)	19.69(6.01)	20.57(5.69)	5.84***	中3<高2,大
母への同一視	21.13(4.27)	19.72(4.64)	21.12(4.58)	22.34(3.90)	9.25***	中3<中1,高2<大
性役割への同調	20.63(3.74)	21.48(4.45)	20.48(4.38)	21.09(3.90)	2.10*	中3>高2
戸惑い	14.47(3.65)	13.23(3.66)	13.99(3.56)	14.17(3.74)	3.38*	中3<中1
性の非受容	4.99(2.10)	5.05(2.23)	4.93(2.14)	4.71(1.88)	n.s.	

*** $p<.001$, * $p<.05$, +.10 $p<.05$

が自覚されている。しかし、中3になるとこの値は逆に低くなる。それは初潮や月経を中心とした「女性の身体受容」が中学2・3年で最低になること(鈴木, 2001)、および後述する身体満足度の低下から、自己の身体に起きた変化を素直に受容できない結果としてこの値の低さを解釈することができる。なお、性の非受容に学年による差はみられない。

以上の結果から、女性モデルとしての母、その母の夫である男性モデルとしての父の両者に対する否定的な評価、逆にモデルの否定から来るステレオタイプな性役割への同調、そして自己の身体に生じた変化の否認というように、中3はあらゆる意味で混乱の渦中にあり、この時期における性同一性の危機が示唆された。

2. 性同一性と自尊感情

性同一性と自尊感情の関係について、これまで男性性・女性性など性役割パーソナリティと自尊感情の関係については多くの知見が得られている(Antill & Cunningham, 1979; 東・今津, 1999; Bem, 1977; 石田, 1994 ほか)。一方、摂食障害との関連で、女性性受容の低さあるいは自尊感情の低さが問題とされることは多いが、両者の関係を面接法以外の方法で検討したものは少ない(鈴木・伊藤, 2001)。そこで性同一性の強さ、およびそのどの側面が自尊感情に関係するのかを明らかにするため、自尊感情を基準変数に、性同一性を説明変数とする重回帰分析を行った。

その際、自尊感情について改めて尺度の検討を行った。本尺度は成人用に開発されたもので、心理的・社会的適応の指標として妥当性が高く、多用されているが、中学生、高校生にそのまま使用できるかは不明である。そこで項目得点と尺度得点との単相関、当該項目を基準変数、他の項目を説明変数とした重回帰分析(SMCは重相関係数の2乗)、および主成分分析による検討を行った。その結果、TABLE 4にみるように、「自分に対して肯定的である」「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」の2項目が単相関、SMC、主成分負荷量とも低く、特に後者は他の9項目中5項目と逆相関を示し($r=-.18\sim-.05$)、中学生から大学生のいずれの年

TABLE 4 自尊感情の尺度構成

	単相関	SMC	主成分
少なくとも人並みには価値のある人間である	.64	.48	.72
色々な良い素質を持っている	.63	.50	.71
物事を人並みにはうまくやれる	.58	.30	.64
だいたいにおいて自分に満足している	.62	.28	.63
自分に対して肯定的である	.35	.11	.33
*何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う	.76	.52	.75
*自分は全くだめな人間だと思うことがある	.72	.50	.68
*自分には自慢できるところがない	.66	.34	.66
*敗北者だと思ふことがよくある	.51	.21	.44
*もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	.15	.13	-.04

注) 逆転項目(*)は逆転した得点で相関を算出した

代でも的確に理解されていないことが明らかとなった。また、前者の項目は中学生によく理解されていない。そこでこの2項目を除き、残り8項目によって自尊感情得点を算出した。 α 係数は.81(10項目の場合.77)であった。なお、自尊感情の学年による差を検討したところ有意で($F=3.62, p<.05, df=3,697$), 中1から中3にかけて大きく低下し、その後、緩やかに上昇するというU字型を示した(中1:25.41, 中3:23.83, 高2:24.03, 大学:25.33)。

学年ごとおよび全体での重回帰分析の結果をTABLE 5に示した。これをみると自尊感情に影響を及ぼす性同一性の側面は、基本的に学年による差がほとんどないことがわかる。この中で自尊感情に強い影響力を持つのは「父への信頼」で、父親のあり方を積極的に評価し、母との関係、夫婦関係を肯定できることがどの学年においても自尊感情を高める方向に作用している。これに対して「母への同一視」はどの学年においても娘の自尊感情に寄与していない。父親像との相関は高いのだが($r=.35\sim.50$), 自尊感情との相関は、父親像に比べ($r=.16\sim.27$)全般に低く($r=.07\sim.16$), それゆえ変動が父親像によって説明されてしまうので母親像独自の寄与はみられない。また、「ステレオタイプな性役割への同調」も関連はなく、性役割観の違いは自尊感情に関係しないといえよう。一方、「性的成熟への戸惑い」では唯一学年による差がみられた。中1で

はその渦中にあり、戸惑いを持つことは当然だが(値も高い), 中3さらに高2になると自分に起きた身体の変化をどのようにみるかで評価が分かれるようになり、変化の渦中を過ぎたにもかかわらず、戸惑いを強く感じていることが自尊感情を低下させる要因になっている。他方、「性の非受容」はどの学年においても自尊感情を低下させ、特に中3でその影響が大きい。性の非受容は父親像とは関連がなく($r=-.09\sim.08$), 母親像と負の関連をもつことから($r=-.20\sim-.16$), 母親に同一視できず、母親像を否定することが性の非受容につながっていると考えられる。

このように両親の(夫婦)関係がうまくいっており、その関係を作りだしている重要な源泉としての父を頼りに思い尊敬できること、他方で母親を肯定しながら自己の性を受容できることが、青年期女子の自尊感情に影響を及ぼしていることが明らかとなった。

3. 性同一性と身体満足度

性同一性と身体満足度との関係について、やはり摂食障害との関連で女性性の受容や身体満足度の低さが取り上げられることは多いが、両者を直接扱った研究は少ない。そこで性同一性のどの側面が身体満足度と関係するかを明らかにするため、身体満足度を基準変数に、性同一性を説明変数とする重回帰分析を学年ごとに行った。TABLE 6にその結果を示した。

これをみると自尊感情ではみられなかった学年による違いが明らかである。身体満足度の学年による差はあまり小さくなく($F=2.30, .10<p<.05, df=3,697$), 中1から中3にかけて低下し、高2までその状態で、大学になると回復するというU字型を示す(中1:3.74, 中3:3.40, 高2:3.50, 大学:3.75)。しかし、ここでは身体満足度そのものより、性同一性が身体満足度に及ぼす影響が、中学までとそれ以降とでは様相を異にするという点である。すなわち、中学までは肯定的な父親像および両親の良好な関係を認知することが、また、自己の性を受容することが自己の身体を受容することにつながる。

TABLE 5 自尊感情を基準変数とする性同一性の重回帰分析結果(数値は標準偏回帰係数)

説明変数	全体 (N=701)	中1 (N=174)	中3 (N=156)	高2 (N=216)	大学 (N=155)
父への信頼	.21***	.26**	.18*	.17*	.23**
母への同一視	.02	-.04	-.01	.08	-.00
性役割への同調	.03	.06	.01	-.02	.13
戸惑い	-.15***	-.06	-.13*	-.29***	-.12
性の非受容	-.19***	-.19*	-.26**	-.16*	-.17*
決定係数(R ²)	.11***	.10**	.12**	.14***	.14***

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, +.10 $p<.05$

TABLE 6 身体満足度を基準変数とする性同一性の重回帰分析結果(数値は標準偏回帰係数)

説明変数	全体 (N=701)	中1 (N=174)	中3 (N=156)	高2 (N=216)	大学 (N=155)
父への信頼	.17***	.29***	.22**	.09	.11
母への同一視	.08+	-.04	.18*	.08	.02
性役割への同調	.02	.02	-.17*	.08	.18*
戸惑い	-.09*	-.10	.00	-.10	-.15+
性の非受容	-.22***	-.34***	-.36***	-.08	-.18*
決定係数(R ²)	.11***	.21***	.24***	.04	.13***

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, +.10 $p<.05$

逆に言えば、ネガティブな父親像を持ち、両親の不和を認知し、さらに自己の性を受容することができないと、自己の身体を受容できにくいことになる。中3ではさらに、母親に否定的で同一視の対象とみなせず、ステレオタイプな性役割に同調することが自己の身体像の否定につながる。しかし、これが大学になると、同じ身体像の否定でも関わる要因が異なってくる。自己の性を受容できないことは同様だが、それまでみられなかった性的成熟への戸惑いがむしろこの段階で寄与し、また中3とは逆に、ステレオタイプな性役割への非同調が自己の身体像の非受容と結びついているといえる。

このように自己の身体像の非受容に関わる要因が中学段階とそれ以降とで異なり、身体面においては中1が性同一性の危機の入り口にあり、中3での混乱が最も大きく、高2の移行期を経て、大学になると新たな段階に入ることができよう。

全体的考察

本研究では、青年期女子の性同一性の発達過程を明らかにすることを目的に、まず、性同一性の構造を解明し、それを測定する尺度を考案した。その結果、当初設定した5領域(主領域4+副領域1)に対応する因子が抽出され、構成概念妥当性が確保された。また、基準関連妥当性でも、「性的成熟への戸惑い」を除く他の4尺度で、受容群と非受容群に有意な差がみられ、性同一性の個人差を測定する尺度として有効であることが明らかにされた。しかし、「性的成熟への戸惑い」は妥当性の点だけでなく、信頼性の点でも若干問題を残し、対象者がどの発達段階にあるかによって受け止め方が異なるため変動が大きく(α 係数: 中1: .63, 中3: .54, 高2: .50, 大学: .57), 結果として高い整合性が得られなかった。しかし、中学生の非受容群における身体像に関する自己評価の低さや強い劣等感(青木, 1991), また臨床的問題を持つ大学生のモラトリウム群(M-II)で、二次性徴に伴う身体的レベルで性的葛藤がみられたこと(小柳, 1982)などから、女子にとって二次性徴を含む身体像の受容は、性同一性を構成する要素として欠かせない領域といえ、性的成熟に限定されない身体受容の項目を考慮する必要があるといえる。

一方、性同一性の構成概念について、本研究では青木(1991)を参考に領域を設定したが、土肥(1996)では「性の受容」「ジェンダー・モデルとしての父母との同一化」「異性との親密性」の3領域で構成されている。その他、女子の自我同一性地位を同定するために設け

られた領域として、従来の職業、価値観に加え、性同一性として「性(の受容)」あるいは「性役割」と「母との相互性」が導入されている(小柳, 1982; 山本, 1988)。しかし、これらの研究はいずれも大学生を対象にしているため、伊藤(1997; 2000b)が指摘する青年前期での身体的側面における性同一性の危機が十分に考慮されていない。発達の視点から女子の性同一性をみるのであれば、二次性徴を含む身体受容は不可欠の領域といえるだろう。

次に、本研究の目的である性同一性の発達過程についてみると、「父への信頼」「母への同一視」は中学3年を底とする発達のな変化を示した。その時期は同時に「ステレオタイプな性役割への同調」が強まり、また「性的成熟への戸惑い」を否認するというように、中3が性同一性の1つの大きな転機になっていることがわかる。特に父親像、母親像については、一般に心理的離乳に伴い否定的になってくるが、そのことが身体満足度と結びついてくるのがこの時期の特徴といえよう。性同一性と身体満足度との関係を見ると、中学の段階では、父親に対する信頼感が持てず、両親の夫婦関係を好ましいものと思えず、自己の性を受容できないと、自己の身体像を受容できにくいことになる。それが中3になるとさらに、母親に否定的で同一視の対象とみなせず、モデルとしての拠り所を失った分、ステレオタイプな性役割への同調を強め、自己の身体像の否定につながっていく。これまで摂食障害との関係で、支配的な母親との関係や(向井, 1998), 両親の不和を認知すること(生田, 1995), あるいは父親との親密な関係を築けないこと(Boskind-White & White, 1987/1991)などが論じられてきたが、親との関係を面接法以外で実証的に検討した研究は少なく、本研究で抽出された性同一性の要因が身体満足度に関わっていることが明らかにされたことで、女子青年の瘦身願望、ひいては摂食障害研究の一助になるものと思われる。

しかし、そのことは裏を返せば、適応上特に問題のない女子でも、中学の段階では性同一性が身体像の受容に強く関係してくることを意味し、他方、高校以降でそのような関係はみられないことから、伊藤(1997; 2000b)が指摘する性同一性の身体的側面における危機が、青年前期に経験されていることを推測させる。

最後に、性同一性と自尊感情の関係についてみると、自尊感情に寄与していたのは「父への信頼」と「性の非受容」で、しかも学年による違いはみられなかった。摂食障害と自尊感情の関係はこれまでも数多く指摘され(皆川, 1993; 無藤, 2000など), 他方、摂食障害を母

娘関係の視点から捉える研究も多い (Bruch, 1978/1979; 斉藤, 1989 など)。しかし, その母親が十全に生ききれていないことの背後には夫との関係があることを忘れてはならず, 両親の関係が良好で, そのような関係をもたらず源泉としての父親への信頼が, 本研究に表れた自尊感情への寄与と考えられる。実際, 鈴木 (2000) では, 父親像→積極的女性性受容→自尊感情→摂食障害傾向 (EAT) というパスが, 中学・高校・大学の全ての学年で見出されており, 肯定的な父親像を持てること, あるいは父親への信頼感が, 青年期女子の性同一性, さらには自尊感情に大きな意味を持つことが明らかとなった。

しかし, それが母親でなくなぜ父親なのかということである。自尊感情と両親の養育行動との関係について明確な結果は得られていないというが (蘭, 1992), 高校生女子の自尊感情と親の養育態度をみた場合, 父母の情緒的支持の高さおよび父親の自律性尊重が娘の高い自尊感情と結びついていた (石川, 1981)。また, 大学生女子の職経歴選択に関わる両親の養育態度をみると, 父親に対する娘の評価は, 自律性を尊重されているか否かに大きく左右されていた (伊藤, 1995)。青年期にある娘にとって, 父親から自律性を尊重されているという認識が, 「自分を (一人前と) 認めてくれている」という自信につながり, そのことが自尊感情に結びついていくと考えられる。プリマレキシアの多くで, 父親との親密さが低いことは, 葛藤に満ちた母親との関係同様, 自分に対する不全感や自信が持てないことの主要な原因といわれており (Boskind-White & White, 1987/1991), “母・娘カプセル” (斉藤, 1989) を生まないための父親の存在, 娘にとって信頼感の持てる父親が重要になってくるといえるだろう。

引用文献

- 阿部輝夫 1999 性同一性障害関連疾患 191 例の臨床報告—統計分析と今後の問題点 臨床精神医学, 28, 373—381.
- Antill, J.K., & Cunningham, J.D. 1979 Self-esteem as a function of masculinity in both sexes. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 783—785.
- 青木紀久代 1991 女子中学生における性同一性の形成 心理学研究, 62, 102—105.
- 蘭 千壽 1992 セルフ・エスティームの形成と養育行動 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽 (編) セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版 Pp. 168—177.
- 浅野千恵 1996 女はなぜやせようとするのか—摂食障害とジェンダー 勁草書房
- 東 清和・今津芳恵 1999 男性性・女性性と社会的自尊感情との関連性 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 10, 1—11.
- 馬場安希・菅原健介 2000 女子青年における瘦身願望についての研究 心理学研究, 48, 267—274.
- Bem, S.L. 1977 On the utility of alternative procedures for assessing psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 45, 196—205.
- Bem, S.L. 1981 Gender schema theory : A cognitive account on sex typing. *Psychological Review*, 88, 354—364.
- Boskind-White, M., & White, W.C. 1987 *Bulimarexia : The binge/purge cycle (2nd ed.)*. New York : Norton. (杵渕幸子・森川那智子・細田真司・久田みさ子 (訳) 1991 過食と女性の心理 星和書店)
- Bruch, H. 1978 *The golden cage : The enigma of anorexia nervosa*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (岡部祥平・溝口純二 (訳) 1979 思春期やせ症の謎 星和書店)
- 土肥伊都子 1996 ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 教育心理学研究, 44, 187—194.
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York : International University Press. (小此木啓吾 (訳編) 1973 自我同一性 誠信書房)
- Harter, S. 1998 The development of self-representations. In Eisenberg, N.(ed.), *Handbook of child psychology (5th ed.)*. vol.3, *Social, emotional, and personality development*. New York : John Wiley & Sons. Pp.553—617.
- 生田憲正 1995 摂食障害の発症要因 精神科治療学, 10, 395—401.
- 石田英子 1994 ジェンダ・スキーマの認知相関指標における妥当性の検証 心理学研究, 64, 417—425.
- 石川嘉津子 1981 Self-esteemと両親像 日本心理学会第 45 回大会発表論文集, 573.
- 伊藤裕子 1988 性差 日本児童研究所 (編) 児童心理学の進歩, 27, 151—181.
- 伊藤裕子 1995 女子青年の職経歴選択と父母の養育

- 態度一親への評価を媒介として 青年心理学研究, 7, 15—29.
- 伊藤裕子 1997 青年期における性役割観の形成 風間書房
- 伊藤裕子 2000a 心理学におけるジェンダーのパー
スペクティブ 伊藤裕子(編) ジェンダーの発達
心理学 ミネルヴァ書房 Pp.1—12.
- 伊藤裕子 2000b 思春期・青年期のジェンダー 伊
藤裕子(編) ジェンダーの発達心理学 ミネル
ヴァ書房 Pp.30—51.
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観
および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31,
146—151.
- Josselson, R.L. 1973 Psychodynamic aspects of
identity formation in college women. *Journal
of Youth and Adolescence*, 2, 3—52.
- Kohlberg, L. 1966 A cognitive-development anal-
ysis of children's sex role concepts and atti-
tudes. In E.E.Maccoby (ed.), *The development
of sex differences*. Stanford, Calif.: Stanford
University Press, Pp.82—173.
- Marcia, J.E., & Friedman, M.L. 1970 Ego identity
status in college women. *Journal of Person-
ality*, 38, 249—263.
- Matteson, D.R. 1977 Exploration and commit-
ment : Sex differences and methodological
problems in the use of identity status cate-
gories. *Journal of Youth and Adolescence*, 6,
353—374.
- 松本真理子・村上英治 1985 女子青年の性同一性
に関する研究—枠づけ面接法による接近の試み— 心
理臨床学研究, 2, 32—43.
- 皆川邦直 1993 神経性無食欲症患者の自己不信 精
神科治療学, 8, 407—416
- Money, J., & Ehrhardt, A. 1972 *Man and woman,
boy and girl*. Baltimore, Md.: John Hopkins
University Press.
- 向井隆代 1998 摂食障害 日本児童研究所(編) 児
童心理学の進歩, 37, 225—246.
- 無藤清子 2000 心理臨床的問題にみられるジェン
ダーの影響 伊藤裕子(編) ジェンダーの発達心
理学 ミネルヴァ書房 Pp.224—251.
- 小此木啓吾・及川 卓 1981 性別同一性障害 懸田
克躬(編) 現代精神医学体系第8巻：人格異常・
性的異常 中山書店 Pp.233—273.
- 小柳茂子 1982 「自我同一性地位面接」による女子青
年の自我同一性の研究(その2)—同一性達成とモ
ラトリアムを中心とした状態像の検討 日本教育
心理学会第24回総会発表論文集, 144—145.
- 斉藤 学 1989 家族依存症 誠信書房
- 鈴木幹子 2000 思春期における女性性受容の発達過
程 聖徳大学大学院児童学研究科平成11年度修
士論文(未公刊)
- 鈴木幹子 2001 思春期女子における女性性受容の発
達過程 思春期学, 19, 75—82.
- 鈴木幹子・伊藤裕子 2001 女子青年における女性性
受容と摂食障害傾向—自尊感情, 身体満足度, 異性
意識を媒介として 青年心理学研究, 13 (印刷
中)
- 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会 1999
児童・生徒の性(1999年調査) 学校図書
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知され
た自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64—
68.
- 山本里花 1988 女子学生の自我同一性に関する研究
—自我の二指向性の観点から 教育心理学研究,
36, 238—248.

付 記

本研究のデータの一部は、多嘉山千春「女子青年に
おける性同一性の研究」(聖徳大学人文学部平成10年度
卒業論文)のデータを本人の了解の下に使用した。
(2000.11.22 受稿, '01.7.14 受理)

Development of Gender Identity in Female Adolescents : Self-Esteem and Degree of Satisfaction with Their Physique

YUKO ITO (FACULTY OF HUMANITIES, SEITOKU UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2001, 49, 458—468

The purpose of the present study were to devise a measure of gender identity, to investigate the development of gender identity in female adolescents, and to examine the relation of gender identity to self-esteem and satisfaction with one's physique. A questionnaire on gender identity, self-esteem, and degree of satisfaction with one's physique was given to 701 female junior high, senior high, and university students. The results were as follows : (1) Gender identity was composed of reliance on the father, identification with the mother, gender stereotypes, confusion about sexual maturity, and resistance to the female gender. (2) The measure of gender identity showed developmental change : it was lower in the older junior high school students than in younger ones, and higher in the senior high school and university students. (3) The study participants reported a crisis of gender identity regarding their physique in early adolescence. (4) The students' self-esteem was related to recognition of their parents' good relationship, and their reliance on and respect for their father for producing such a relationship. It was suggested that fathers have considerable influence in the relationship of gender identity to eating disorders. The reliability, construct validity, and criterion-related validity of the Gender Identity Inventory for Females (GIIF) have been verified.

Key Words : gender identity, self-esteem, degree of satisfaction with one's physique, eating disorders, female adolescents